

ボンヘッファーの反ナチ抵抗運動と「形成」

逢坂暁乃(早稲田大学)

ディートリッヒ・ボンヘッファーは反ナチ抵抗運動に参加する前後でキリスト教倫理に関する多くの草稿を記した。本発表では、そうした草稿のうち1940年9月から書き始められた「形成としての倫理学 Ethik als Gestaltung」における「形成 Gestaltung」を、当時の政治状況やボンヘッファーの反ナチ抵抗運動と照らし合わせながら検討する。ボンヘッファーは「形成」、つまりはキリストと同じ「形に成る」ことを考えることが理論倫理学と現実を接続する、倫理を「具体的な場所」で実践する手立てになるのではないかと考えていた。さらに、「形成としての倫理学」のなかでは、ヨーロッパ世界における思想や政治の歴史が没落していること、キリスト教世界もまた崩壊していること、そうしたことが「形成」との関係のなかで語られている。「形成としての倫理学」には、当時の政治状況やボンヘッファーの反ナチ抵抗運動との連関が様々な形で見出されるのである。

本発表の目的は、「形成」を検討することを通してボンヘッファーがどのように自身のキリスト教倫理を「具体的な場所」に結びつけるに至るのか、そうしたボンヘッファーの思索がどのように反ナチ抵抗運動に結びつくのかを考察し、キリスト教倫理からいかにして倫理実践が導き出されるのかを明らかにすることである。なお、本発表は以下の通りの構成を予定している。第一に、ボンヘッファーの「形成としての倫理学」における問題意識とその問題意識に影響を及ぼすボンヘッファーを取り巻く状況を確認する。第二に、「形成としての倫理学」では「キリスト」がどのようなものとして考えられているのかを明らかにする。第三に、「形成」とは何であるのかを検討する。第四に、その「形成」がどのようにして「具体的な場所」へと繋がるのかを整理することで、ボンヘッファーのキリスト教倫理と倫理実践及び反ナチ抵抗運動の結びつきを考察する。最後に、ボンヘッファーが「遺産」として語るヨーロッパ世界とキリスト教世界における歴史と教会の問題を検討し、結びとする。

ボンヘッファーは、自身の世代が理論的・体系的倫理にほとんど関心をもっていないという問題意識を持っていた。とはいえ、それは倫理に対する無関心に由来するのではない。自身の世代の現実には「具体的な倫理的問題」に満ちている。この「具体的な倫理的問題」は、時代状況をふまえれば第二次世界大戦やヒトラーの台頭に置かれて用いられている言葉であろう。そして「具体的な倫理的問題」に満ちているがゆえに、それら全てに対応できるような体系的な倫理を語る事が難しい。だからこそ、理論的・体系的倫理への関心が薄れてしまっているのである。そこで、そうした現実・時代における「倫理」とは何かということが、「形成としての倫理学」のなかでは考えられていく。

「形成としての倫理学」は問題意識を確認したのちに「この人」、つまりキリストを「見る」、参照するように促す。キリストを参照すると、「神の愛」を現実から離れる根拠にするのではなく、むしろ神の愛に基づいてこそ現実や現実の苦しみを経験しなければならないことが導き出されるとボンヘッファーは考える。キリストという「神とこの世界の和解」を為した存在を中心にすえることで、「具体的な場所」へキリスト教倫理が開かれるのである。また、ここでボンヘッファーは三つのキリスト像を提示する。それは「人となった神」「神によって裁かれた人」「復活した人」の三つであり、これ

はボンヘッファーが他の著作・書簡で重視するキリストにおける三つの出来事「受肉・十字架・復活」に相当する。

そして、ボンヘッファーの理解では、今までの「形成」とは、キリスト教の教えや原則を現実世界に適用し、世界を「形成」することであった。こうした「形成」に対して、「形成」という概念をボンヘッファー独自にとらえ直すことを試みる。しかし、それは全く無根拠に行うわけではなく、改めて聖書に立ち戻ることによって「形成」を捉え直すことなのである。「形成」、「キリストの形に成る」とは「真の人間になる」とことだとボンヘッファーは考える。つまりは、決して人間を超越しようとしたり、英雄になろうとしたりするのではなく、どこまでも人間であらねばならないし、人間であることができるような事態が「形成」では考えられているとボンヘッファーは理解するのである。こうした「形成」に対して参照すべきは、1937年の著作『服従 Nachfolge』を中心として一貫してボンヘッファー神学において重要となっているキリストへの「服従」であろう。「形成としての倫理学」は、単に時代状況に呼応してだけ書かれた草稿ではなく、ボンヘッファーの反ナチ抵抗運動以前からの思索や倫理が自身の置かれた状況と結びつく、初期著作からの思索の流れのうえにある草稿なのである。ボンヘッファーは「服従」として、徹底的な無私とキリストに対する服従を語るなかで、「服従」はあくまでもキリストによる恵みの招きによって成り立つと考えていた。そのなかで、キリストの十字架の苦しみを負うこと、そうした倫理的なあり方が主張された。「服従」は「形成」と同様、あくまでもキリストの働きかけによるものでも、ある種の倫理的なあり方の模索でもあった。ただし、「服従」においては「個人」及び「個人の決断」が重視されていたのに対し、「形成」は「現実の人間」「具体的な場所」が重視されている。

さらに、「形成」を理解するためには、「形成」と「具体的な場所」の関係、つまり「今日」「ここで」形に成るとはどのようなことか理解する必要があるとボンヘッファーは主張する。ボンヘッファーにとっての「今日」「ここで」ということは、今・ここというある種の「部分」であったにせよ、「人類の全体の部分」としてそれを理解しなくてはならないような概念である。つまり、ボンヘッファーの「今日」「ここで」という時間・空間の限定は、限定ではあると同時に、あくまでも「全体の部分」であるということが確認される必要があるような「今日」「ここで」である。さらにそれを言い換えるならば、われわれに関係を持ち、われわれが経験し、われわれにとって現実であるような時と場所であり、どこまでもわれわれに関係し、経験可能な、現実がここでは問題にされている。

ボンヘッファーは、こうした「形成」がヨーロッパ世界やキリスト教世界の歴史、「歴史的遺産」をとらえなおすことにも資すると考える。「形成」を通して、拒まれてしまっている歴史的遺産を受け継ぎ「崩壊」を免れうる可能性までも見るのである。

・参考文献

Dietrich Bonhoeffer, *Dietrich Bonhoeffer Werke Bd. 6, Ethik*, zusammengestellt und herausgegeben von Eberhard Bethge, Gütersloher Verlagshaus, Gütersloh, 2015, 森野善右衛門訳『ボンヘッファー選集4 現代キリスト教倫理』新教出版社, 1962年。
Eberhard Bethge, *Bonhoeffer Theologe-Christ-Zeitgenosse*, Chr. Kaiser Verlag, München, 1967.

Madeline Jeanne Levy, *The Marriage of Thought and Action: A Study of Dietrich Bonhoeffer*, Whitman College, 2015.

Peter Zimmerling, *Bonhoeffer als Praktischer Theologe*, Vandenhoeck&Ruprecht, Göttingen, 2006.